

日本の幼年童話 19

南の島の子もりうた

久保 喬・作
洲上昭廣・絵



岩崎書店

日本幼年童話19

南の島の子もりうた

久保 喬・作 1973

岩崎書店

114P 21cm NDC 913

日本の幼年童話19

南の島の子もりうた

1973年12月30日

著者／久保 喬

発行者／森山甲雄

発行所／岩崎書店

東京都文京区水道1-9-2 〒112

電話 03・812・9131

振替 東京 96822

活版印刷／第一印刷株式会社

オフセット印刷／清水印刷紙工株式会社

製本／株式会社 小高製本

© Takashi Kubo, 1973

(分)8393(製)511973(出)0360

日本の幼年童話 19 南の島の子もりうた もくじ

南^{みなみ}の島^{しま}の子^こもりうた……………5

ガラスのなかのお月^{おつき}さま……………19

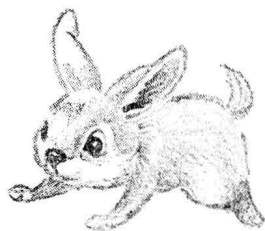
ふしぎなどうぶつえん……………27

ゆきのなかのおや子^こたち……………37

ガンがまたくる……………57

日^ひようびが二どきたら……………59

おんがくの町^{まち}……………65



ふしぎなおうむ……………77

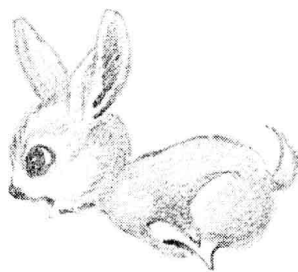
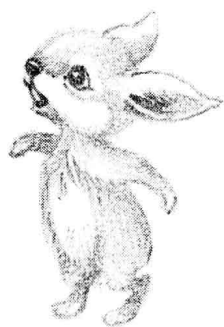
ひらけ、ごま……………87

おどるなみわらうなみ……………101

解説^{かいせつ}Ⅱ作家^{さつか}と作品^{さくひん}について……菅忠道^{かんただみち}

装幀^{さうざん}Ⅱ宮川源太郎

表紙・口絵・さし絵Ⅱ渕上昭廣



読者のみなさんへ

このシリーズ『日本の幼年童話』は、日本の近代、現代の創作童話のなかから、小学校初級～中級程度の読者を対象に、現代の子どもたちの興味をひき、児童文学として朽ちない生命をもつ作品を精選して、おもに作家別に編集したシリーズです。

幼年童話という形式や枠にとらわれず、作品の質を第一に、広い範囲から自由な作品選抜をおこなったところに、このシリーズの特色があります。父母・教師のかたたちにも、あわせてご愛読をえられれば幸いです。

編集委員

菅忠道／関英雄

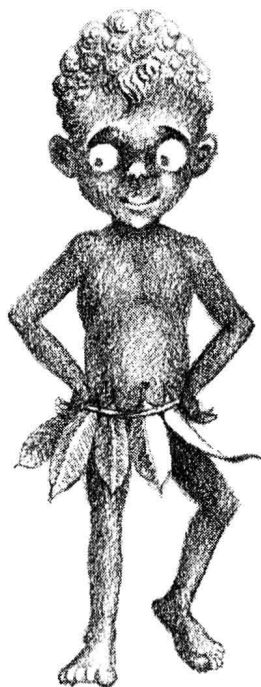
作者紹介

久保喬（くぼ・たかし）

1906年、愛媛県宇和島市でうまれた。本名隆一郎。松山商業学校卒業後、数年家業に従事したのち上京。東洋大学専門部東洋文学科中退。児童図書出版社に勤めた。その後、童話、少年小説をながく書きつづけている。日本児童文学者協会会員。おもな著書に、

「カエルのラジオ」「かしの木ホテル」「ビルの山ねこ」「海はいつも新しい」「ネロネロの子ら」「少年の石」「赤い帆の船」などがある。

南みなみの島しまの子こもりうた

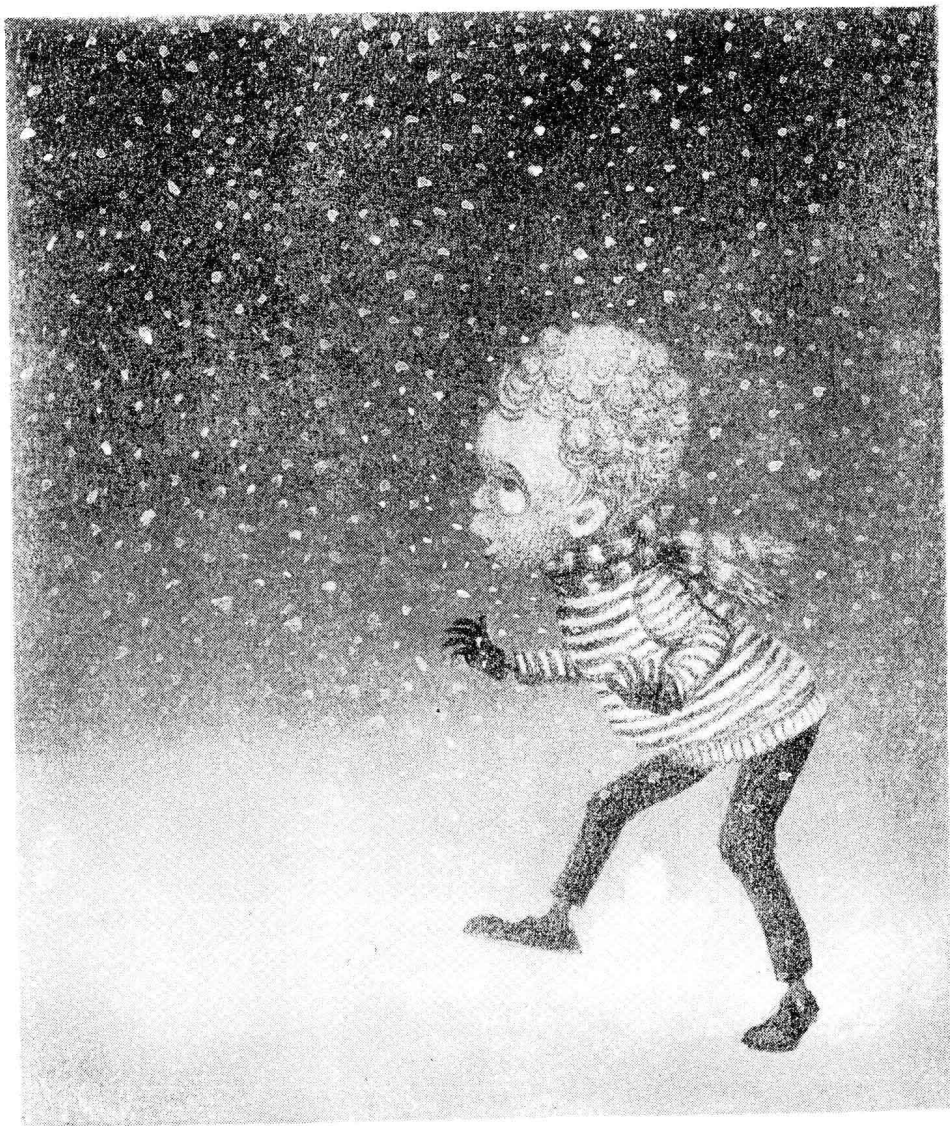


とおい南みなみのくにの島しまの 子こどもが、ニホンへきていました。ア
リムという名なの男おとこの子こでした。かおも、からだも、チョコレート色いろで、
歯はだけが白しろくひかった子こでした。でも、まるいくりくりした目めは、
かわいくて、りこうそうでした。

南みなみの島しまの海うみのなかには、にじのようにうつくしい色いろをした貝かいがあ
ります。それは、ようふくのボタンになります。その貝かいをとりにい
った三木みぎさんという人ひとにつれられて、アリムは はるばるニホンへ
やってきたのでした。

アリムが、ニホンへきたときに、いちばんおどろいたのは、ユキ
でした。

やしの木きの葉はに、キラキラと いつもあつい夏なつの日ひがてっている
南みなみの島しまでうまれたアリムは、ニホンへきて はじめて冬ふゆというもの



7 南の島の子もりうた

にであったのです。だから、ユキをシオだとおもって、

「ソラカラ、シオガ オチテクルネ」

といって、三木さんにわられました。そのユキがめずらしくて、アリムは外へとびだすと、りょう手で ユキをかきとって、クンクン はなで かいでみたり、ペロペロと なめてみたりしました。池の水が、かたく かたく なったのにも、びっくりしました。

「ホウ、水ガ石ニ ナッタネ」

だが、それは、「コオリ」というものだ、おしえられました。手がつめたくなりました。だが、アリムは、つめたいということばを、まだしらないので、

「イタイネ、イタイネ」

と、いいました。

あつい国で、いつもはだかで、ふんどしひとつで くらしていたアリムは、さむさに へいこうしました。うまれてはじめて、「シ

モヤケ」という 手のビヨウキになりました。

2

それから、アリムがおどろいたのは、「タテモノ」と、「ノリモ
ノ」でした。

「イエガ大キイ、大キイネ」

南の島の やしの木の葉でつくった やねのそまつな、小さい家
だけかしらなかったアリムには、ビルディングなどをみたとき、ど
うしても家とはおもえませんでした。

（山ガアルネ、ヘンナ山ガ）と、はじめは おもったくらいでした。

それは、にんげんが つくったもので、その中に いつも たく
さんの人がいることがわかって、びっくりしてしまいました。

汽車や電車は、「ハシル家ダネ」と、アリムはおもいました。の
っていると、あんまりはやくて、目がクルクル クルクルして、ゆ

めをみるようなきもちになります。

デパートへつれられていったときは、エレベーターを おもしろ
いとおもいました。

「ホウ、コレ、ウゴクハ、コダネ」

と、いったら、みんながわらいました。

テレビもふしぎなものでした。

あの小さいはこの中から、いろいろな人間や動物や、さまざまの
けしきなどがでてきます。どこからやってくるのかしら。

まるで、まほうつかいのはこです。

（そうだ、テレビだけではない、ブンメイというものが、まほうな
んだな）

と、アリムはおもうのでした。

アリムのあたまの中には、ふと、ふるさとの島がうかんでしまし
た。——まっさおな海のそばで、ザワザワと、ココやしの木の葉が

風にかぜにさわいでいます。そのかげの小さな木の葉ぶきの家のまえで、石でつくったおのをふりながら、コンコンと まる木をほって、小さなそまつな船をつくっている、はだかのおとうさん。——小川でくんできた水を、ヤシの木の実のカラにいれてのんでいるおかあさんも、やっぱりはだかで、タコの木の葉をこしにつけているだけです。ああ、いまアリムがいるところとは、まるでちがうふるさとです。ブンメイの国の人たちは、島の人たちとくらべると、「カミサマ」のようだなあ、と アリムは ひとりでおもうのでした。



だがある日、そのカミサマのひとりが、みょうなことをしました。アリムが、小さいカバンをもって、町をあるいているうちに、まい子になりました。アリムがうろうろしていると、

「ドウシタカネ」

と、やさしいこえを、かけてくれた人がありました。

「ミチガ ワカラナイカネ。ウン、ツレテイッテアゲル」

そういつて、その人は、アリムのカバンをもつてくれて、しばらくいっしょにあるきましたが、いつのまにかみえなくなりました。アリムは、すっかりこまってしまって、なみだをポロポロこぼしているとおまわりさんがやってきました。そうして、やっと、三木さんのうちまで かえることができました。だが、カバンはなくなりました。

「ドロボウニ　トラレタノダヨ」

と、三木^{みぎ}さんはいいました。

ドロボウというニホンのことばを、そのとき、アリムはおぼえま
した。

それから、また、アリムが　とてもいやな^き気がする
ことがありました。それは、町^{まち}をあるいていると、

「クロンボウ、クロンボウノ子^こダヨ」

と、いう声^{こゑ}がして、みんなが、じぶんをみる
ことです。アリムとおなじ年^{とし}ぐらいの　子^こども
たちが、そろそろと　まわりにあつまっ
てきたりします。そんなときの　みんなの目^めつきが、
アリムにはいやでした。

たくさん、たくさん　にんげんが
いる中^{なか}で、じぶんだけは、色^{いろ}の
ちがった、ひとりぼっちの子^こども
なのだということを、アリムは
むねにかんじるのでした。

アリムは、げんきがなくなりました。

「三木^みサン、シマへ カエリタイネ」

と、いうようになりました。

(アア、チガウ^く国^{くに}ノ チガウニンゲンノ イルトコロナンカ、モウ
イヤニナツタ)

と、アリムはおもいました。

三木^みさんは、しんぱいして、

「アンマリ、イロンナモノヲ^み見テ、ビックリシタカラ、心^{こころ}ガツカレ
タノダロウ」

と、いいました。なるほど、そうかもしれません。

電車^{でんしゃ}や自動車^{じどうしゃ}のおとが、ガアガアきこえる家^{いえ}の中で、アリムは夜^{よる}
もねむれなくなりました。

ところが ある夜、フトンの中にはいつていたアリムに、ふと、やさしいうたごえが きこえてきました。

それは、はじめてきくうたなのに、なんだか、とてもなつかしいような気がするうたでした。

すぐむこうのえんがわで、三木さんのおくさんが、あかちゃんをだきながら、うたいだしたうたでした。そのことは、アリムにはよくわかりませんでした。でも、すぐに、

（アア、オカアサンノウタダナ）

と、おもいました。

ふるさとの南の島の、アリムのおかあさんも、やっぱり、アリムの小さいおとうとをだいて、あんなうたをうたっています。

（オカアサンノウタニ、ヨクニテルナ）

アリムは、なんだか、うれしいような、なつかしいような気もちで、そのニホンの子もりうたに、じっと耳をかたむけました。